



# 太夫

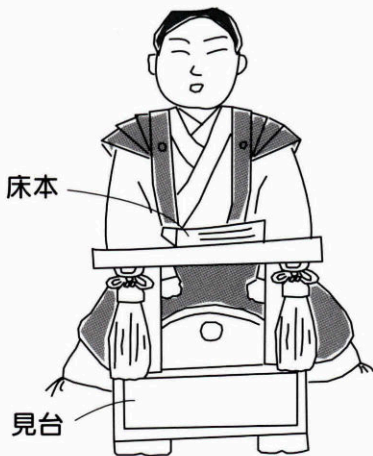
登場人物の心をお客様に

浄瑠璃の義太夫節は、詞・地合・節の組み合わせから成り立っています。そして浄瑠璃のほとんどは古語（江戸時代の大阪の言葉）で語られています。床本といわれる台本は1ページに5行、太夫の自筆で書かれています。その内容は人間の本質を描いたもので、現代に通じることも多くあります。

【詞】登場人物の台詞・会話の部分。老若男女の一人ひとりを語り分け、人間の喜怒哀楽、心の本質を伝える。

【地合】三味線と息を合わせて情景を語り、音の高低、強弱、長短、間などで言葉に抑揚を付ける。

【節】音楽的旋律とリズム。



腹式呼吸が基本

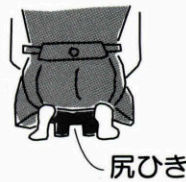
大きな声を出すには腹式呼吸（お腹か

ら呼吸して発声）が基本です。太夫は、正しい腹式呼吸をするために、腹帯・オトシ・尻ひきなどいろいろな工夫をしています。

【腹帯】お腹に力が入るように、帯の芯のような腹帯（約7センチ幅）で、下腹部をしめる。

【オトシ】体のバランスをとるため、砂・小豆を入れた小袋を懐の中に入れる。

【尻ひき】座るときお尻の下に敷く小さなイス。これを敷くことにより、かかとが立ち足の指先に力が入る。



# 三味線

物語の情景・状態を音で表現

三味線は単なる伴奏だけでなく、太夫と一体になり共演しながら演奏を進行します。動物の鳴き声や雨風などの自然の音、実際には音のしない雪景色等の擬音から、物語の雰囲気や登場人物の性格まで、バチ先ひとつでいろいろな音を弾き分け表現します。

太棹と呼ばれる三味線を使用

文楽では太棹と呼ばれる三味線が使われています。これは、細棹（長唄、小唄で使用）、中棹（常磐津、地唄で使用）に

比べて、棹も胴も大きく、重い響きのあるスケールの大きな音がでます。ちなみに、津軽三味線も太棹が使用されています。



【太棹】棹や絃が太く、胴や駒も大きい。

【撥】普通のものより大きくて重い（約300グラム）。象牙製。

【糸道】左手を棹にそわせて動かし、指で絃の上から押さえるため、糸道と呼ばれる溝が、人差し指と中指の爪先にかけている。

